

胸に彫られた竜とメドゥーサ

——東西文化の比較対照——

高 橋 堯 昭

筆者は東西でまことに対照的な像を発見し非常な興味を感じている。一つは弥勒菩薩像の胸で二頭の竜が向き合つて経筒や宝珠をくわえている像であり、もう一つはローマ皇帝トラヤヌスの鎧の胸のメドゥーサの像である。メドゥーサはギリシヤ神話の神、その髪の毛が一本一本蛇といふこの神は多産豊穡の神として西アジアからローマ帝国の領域にかけて信仰されていた。為にトラヤヌス帝もこの神にあやかろうとしたのである。

問題はその後のもう一つの像の運命である。竜は現在に至るまで依然として「仏法の守護神」「幸運の神」として寺や民家の中に祀られているが、一方のトラヤヌス帝の胸のメドゥーサは悲惨な運命をたどつて行つた。共に地母神・大地の神そして多産豊穡の幸福の神として信仰されて来たのに、天なる神・一神教が成立するとメドゥーサは地母神・多産神のシンボルとして、見せしめの如く、次々と壊わされたり、又地下水槽深く、土台の下に「横倒し」にされたり、「逆さま」にされたりして封じ込められて行つた。この地母神に対する東西の考え方の対比が重要に思える。即ちここに東西の文化の特徴が如実に示されていると思われるからである。この小論は「胸に彫られた像」を介して東西の文化を比較対照を試みたものである。

胸に彫られた竜とメドゥーサ（高橋）

胸に彫られた竜とメドゥーサ（高橋）



地母神の代表 大神アルテミス（アンタリア博物館）

素朴な技術しかもてなかった古代の人々は大自然の一寸した気候変動にも、収穫は皆無になり、大きくその運命を左右されて来た。そこで人々はこのすべてを育くみ育ててくれる大地の神に、ひたすら収穫と幸せを祈る為に土をこね、小さな人形のような像を作った。これが地母神像である。然し不思議なことに、何の連絡もない遠隔の地でも又時間的に何千年という差があっても、これが非常に似ている。例えば西アジアの大古のものも、日本の縄紋時代のものも非常に似ている。「乳部」や「腰」が物矮く大きく、陰部がはつきりくまどられている。女性が子を産み育てることに「増える」ことを見、作物の増産・種族の繁栄をみたのであろう。こうした考え方は人類が農耕をはじめた頃から既に獲得していた共通の考え方により似かよった像が出来たのであろう。所謂エリアーデの言う「鋤は男根に、鋤き返された地面は女性とみなされ、大地は生殖の子宮。生命の再生力の尽きることのない創造と活力を保持した大地」⁽⁹⁾即ち地母神ということになる。

ギリシャ神話では、この地母神を「大地(ガイア)が万物の祖として君臨していた。大地は女性で男性である天(ウラノス)と交って子を産んだ」と表現した。即ち大地こそ神々の系譜の根源として重視したのである。

これも前述のように、農耕的発想で、男性である天からの雨を貯え、植物を生育させ穀物を実らせるのがこの大地ということから、所謂大地の生命力生殖力を強調した木偶像のものから、地中から出るものでこれを象徴するようになって来た。一例をあげれば、天にも達するかの如き大樹⁽¹⁰⁾、はた又大地から涌現したような奇岩・洞窟⁽¹¹⁾、そして大地からはい出して来る「蛇」等々である。



胸に膨らんだ竜とメドゥーサ（高橋）

へびをもつ地母神 マリ遺跡出土（BC, 3000年）

蛇は冬眠からさめて大地から出て来るや脱皮して成長する。その脱皮に古代人は再生を見、又男根に似た頭で一撃のもとに他を殺し、たたいても、半分に切っても動いているたくましさ。又その交合は延々二十時間にも及ぶと言われるその生命力に、蛇こそ地母神の象徴と考えられたのはごく自然のことであった。紀元前三千年のメソポタミヤのマリ遺跡から出土している前頁の写真の像や、又「二匹の蛇がからみ合いキスしている像」、紀元前一六〇〇年のクレータ島の「両手に蛇をもつ」大地母神像はこうした古代人の考え方を表している。共に大地の生命力を表す地母神乃至その象徴・お使いとも考えられていたからである。日本にも縄文土器にマムシの装飾のついたものがある。まさに洋の東西を問わず同じ考え方、同じ彫刻が残されている。



インドでは、こうした生命力の地母神を「樹神」や「地神」として表していた。あの暑いインドでは人々の生活はいきおい樹の下になり岩の洞窟になる。なぜならカルラー・バジャヤー等の西南インドの窟院の如く、洞窟は夏はひんやりし、冬は火をたくといつまでも暖かいから人々はその中で生活し易かった為である。

まず樹について述べると、農村では大樹の下に家が作られ、牛や家畜を飼う。暑い日中では老いも若きも樹の下でごろごろ昼寝している。日をきめてひらかれる「市」も、大樹の下をぐるりと巡って店の列が作られる。町に行くと自転車屋もアイスクリーム屋も樹の下に店をひらく。横町では大地に手をかけ、頭を太い幹にこすりつけている者をよくみかける。筆者は最初の頃樹の下で用を足していると思った程である。実はそうではない、その樹の幹には赤い粉がぬられ、又樹の下には小さな祠があっていろいろの供えもの（プジャヤー）がしてある。祠のない場合でも赤く塗

胸に彫られた童とメドゥーサ（高橋）



臍から万物を生む夜叉（サンチー）

樹下ヤクシニー（パールフット出土）

（カルカッタ博物館蔵）



られ供えものがしてある。大樹そのものが祠という意味である。大樹を大地の生命力の表現、地母神の象徴として信仰しているのである。

こうした大地の生命力は前述の如く、樹だけではない。快適な洞窟の中での生活から「地の神」という考え方が出、やがて、これら人間 の体で表現するようになる。これがヤクシヤ・

ヤクシー(夜叉)¹⁷⁾である。更に、頭は象やワニ、尻っぽが魚や蛇という「マカラ」でこの大地の生命力を表現するようになる。然し何より民衆に強い信仰をもっているのは「ナーガ(蛇)」「ガンダーラでは竜」である。コブラは暑いインドでは実に恐ろしい生きものである、現代でも年々多数の人命が失われているトータム獣となっている。即ちトータムの常として「怖ろしいものは、逆にその強い力で我々から悪魔を撃退してくれる」と信じられているからである。かくて蛇は多くの中の中に「守護神」として彫られ、例えば仏塔をぐるぐる巻きにしているもの¹⁸⁾、寺の屋根の棟は大蛇の胴体、瓦はウロコ、柱も蛇がぐるぐる巻きだし、橋の欄干も蛇身のもの¹⁹⁾まである。それだけではない。民衆の中にも蛇や竜があちこちに彫られるようになって来る。これ程蛇は民衆の生活の中に生きている。



これは西アジアや地中海沿岸でも事情は似ている。前述の如く西紀四千年頃のメソポタミヤのウル遺跡には王と思われる人物が両手に大蛇をもった浮彫りがあり、前三千年頃のマリ遺跡には容器に二匹の蛇がからまり合っている。又大地母神イシュタルの神像も、「蛇目のイシュタル」と²⁰⁾いって蛇のような目をもった像も数多く出土している。更に又前六百年頃のクレータ島出土の像には大地母神像が両手に蛇をもつ²¹⁾がある。これらの彫刻から蛇を大地の生命力の象徴として崇拜する信仰がこの地方にあった。これを裏返せば当時この地方が農耕地で、大地は豊かな母とされていたことがわかる。こうした例は枚挙に遑まない。



やがてこの農耕民的思考はギリシャ神話にうけつがれ、地中海の沿岸、特に小アジア（トルコの沿岸地方）にギリシャの植民都市が拡大するにつれて、ギリシャ神殿が作られて行った。そしてメドゥーサ像はここに数多く彫られて行った。これらの地方が農耕地であったからであろう。為に多産や収穫の増大を祈ったからであった。

然し、人類の精神史の上に変化が起つて来た。大地の神から天なる神への転換が行われて行った。これは母系制社会から父系制社会への変化、村落共同体から巨大な中央集権国家への社会政治経済体制への変化にかかわっているであろうが、何よりも女性原理中心の社会から男性原理中心社会への変化が示されている。その変化の何よりも大きな要因は、大地の再生力の根源となる降水量の変化によるものであろう。即ち西アジアをはじめインダス流域に至るまで気候に変化が起つた。西紀前約一五〇〇年頃からこの傾向は一層顕著になった。今まで降雨によつての豊潤な国土の乾燥化が進み、砂漠化するようになった。従つて住民にとっては、すべてをはぐくみ育てる大地に生命力が感ぜられなくなり、雷が鳴つて雨を降らせる天なる神の方が住む人にとっては有難く感ぜられるようになって行ったからであろう。

こうした傾向を示すものとして、紀元前一五〇〇年頃から「蛇を殺す神々」が登場して来た。所謂「天なる神」の一神教の成立であった。この一つがパール神の成立である。ユーフラテス河畔の町テルクから出土したパール神の彫像がそれである。即ちアツシリヤ王トウクティニマタ二世が西紀前八八五年に建立したといわれているこの像には、左手に角の生えた蛇をにぎりしめ、右手で斧を振り下ろそうとしている。これは一神教が成立して来ると、多くの地母神信仰が追放されて行ったことを象徴している。その最たるものが旧訳聖書にある「アダムとイブに禁断の木の実を食べるよう誘惑したのが蛇である」という神話の成立である。地母神たる蛇を悪の権化として否定しようとする意

図がはっきり見える。更に「多神教の町ソドムが神の業火で焼かれる時、ふり返るなふり返ると石に化す」⁽²⁶⁾等々のシーンは、これでもかこれでもかとの大地の神多神教を攻撃しているのである。

胸に彫られた竜とメドゥーサ (高橋)



パール神 (シリア・アレツボ博蔵) 右手に蛇、左手に斧
(BC 885年)



胸に彫られた竜とメドゥーサ (高橋)

こうした宗教、ユダヤ教をひきついで一神教キリスト教がひろがって来ると、多神教の神殿やギリシヤの神殿が壊

ハドリアヌス帝の鎧の胸のメドゥーサ ルーブル博蔵

され、その石材
を使って教会や
関連の建物が建
てられて行った。
その時、最も
苛酷な運命にさ
らされたのはギ
リシヤ神話の神々
のうちのメドゥー
サである。その
毛が一本一本蛇
といわれる怪奇
な姿の神は、そ
の蛇という地母
神・多神教の神
ということから、



逆さまに封じ込まれたメドゥーサ像 イスタンブール地下水槽

かつてはギリシャの植民都市全域、特に小アジアの農耕地帯にメドゥーサは豊穡多産の神として広く信仰されていたが、その像はことごとく壊されて行った。

メドゥーサは見るからに気持の悪い姿でもあるが、ギリシャ・ローマ時代には神殿の正面玄関の梁に飾られたり、柱や部屋壁の随所に彫られるばかりか、王の鎧の胸にまで彫られるようになった。

即ちトルコ南部のアンタリヤ市の東のベルゲ遺跡出土のローマ皇帝トラヤヌス帝（西紀九七―一〇七年）やハドリアヌス帝（西紀一一七―一三八年）の像である。この二人の皇帝はローマが最も繁栄した時代の皇帝で、特にトラヤヌス帝は伝統的なローマの宗教の復活に努め、キリスト教徒を迫害した皇帝としても知られている。この二人の皇帝がつけていた鎧の胸元にはメドゥーサが彫られている。如何にキリスト教の拡大以前に、このメドゥーサが広く豊穡の神・幸運の神として信仰されていたかがわかるうというものである。

これが、キリスト教がひろがって来ると、メドゥーサ像はことごとく壊されて行った。特にユスティニアス帝が東ローマ帝国の首都コンスタンティノープル（現在のイスタンブール）にアヤソフィアをはじめとする教会関連の建物の大工事を行うに際し、地下宮殿とよばれる大貯水槽を作った時、一番奥まった柱の土台として、このメドゥーサを埋めてしまった。一つは「横向き」に、もう一つは「逆さま」にして、恰も封じ込めるかの如く、深い深い暗黒の地下水槽の奥底に埋めてしまった。

近年の大貯水槽の水をぬいて大修理が行われた時、これが偶然発見された。こうした事実から一神教のあくなき多神教の排除追求のはげしさ、否その追求の執念を見る思いにかられるのは筆者だけではあるまい。

これに対して東洋の宗教は趣を異にしているアシヨカの摩崖証勅が如実に示している。

「みずからの宗派に対する信仰によって、みずからの宗派のみを賞揚し、或いは他の宗派を難する者は、このようになす為、かえって一層みずからの宗派をそこなうのである。ゆえに、もっぱら、互いに法を聞き合い、又それを敬信する為に、すべて和合することこそ善である」とある如く、一つが成立すると他をすべて否定することはしなかった。特に仏教はすべての宗教を自己の中にとり込み、その神々を自己の中に守護神としてとり入れて行った。こうした寛容性・和の宗教、これが仏教であった。その中でとりわけ強い包容性をもつのが法華経である。

法華経はユニークな經典である。すべての神々、すべての文化、あらゆる人々を包み込んでいる經典である。方便品を中心とする前半では縁起の理法の解明によって、すべての存在の成仏の可能性を解明、従って三乗は否定されるべきものではなく、一仏乗への方便として包容している。寿量品では仏陀の時間空間での超越性を示し、仏陀の方から手をさしのべすべてを包んでくれる慈悲。それだけではない。筆者にとつての最大関心事は第二十三品（妙法華経）以後の諸神の包容摂取と、その夫々の神々を法や行者守護の神としている所である。これは仏教というより、東洋的知性・文化の一大特質であると思う。これらについてはいろいろの機会で論究して来た。然し今回は西アジアの地母神が一神教によって排撃駆逐されて行ったプロセスとの対比によって、その地母神関連の神々について項を追ってレジメ程度に略述して比較対照の資としたい。

(1) 樹神の包容^②

胸に彫られた竜とメドゥーサ（高橋）

仏教の中には樹神・夜叉信仰等仏教以前の神々がとり入れられている。否むしろ釈尊もそれ以前の宗教の中で育つて来たといえる。諸仏典によると、釈尊の生れる際マヤ夫人は樹神に詣で樹の枝をもつと釈尊が誕生し、誕生の宮参りに樹神に詣でると、樹神は「その子こそ、『神の中の神』として逆にひざまづいた」という話が出来た。やがて釈尊が出家出城の時、大地から夜叉が湧現、愛馬カンタカの足をかっいで蹄の音で城中の人が目覚めないようにして城外に運んだ。或は悟りの際菩提樹の下で樹神が薬を敷いて招じ入れ、いよいよ悟りに近づくとマーラが悟りに入るをさまたげたのを地神が大地震を起して、マーラを退散せしめた等々、仏伝中には樹神地神とのかわりかはりは枚挙に遑まない。樹神も地神も共に「夜叉」として古来より民衆に深く信仰されていたからである。

仏陀はこうしたインドの在来の信仰の中で生れ且つ生活して行った。特に信者から竹林精舎、祇園精舎を寄贈された後でも樹の下から樹の下に、又洞窟から岩かげにと遊行して歩いた。樹とは樹神、洞窟や岩は地神、これらに包まれて生涯を送られた。そして又樹の下で入滅して行かれた。為に「樹神の祀り方に従って祀られて行った」

従って樹神・地神の考え方の伝統から釈尊はいっしか「人間」という枠を越えて、超越者の方向に進んで行った。理想的偉人の具すべき特徴たる三十二相・八十種好を具し、心には不可思議な力、即ち十力・四無畏・三念住・大悲の十八不共法を具し、現実の歴史的存在が人格化され、神々の上に住する存在となって行った。

更に釈尊への畏敬は、必然的に釈尊が余りにも偉大なので、「只の人ではなく、過去世に無量の徳を積んだ方（報身）ではあるまいか」との立場からジャータカが生じ、更に進んでもともと無始無終の仏（法身）であり、この仏が救済の為此の世に生れ（応身）という論理に進んで行った。これが阿弥陀一仏・法華一仏乗へと、一神的超越者に似て行った。然しこうなっても、他の神々を否定せず、自らの体系の中にとり入れて行った。夜叉の総大将の毘沙門天

がその例であった。然も仏教の包容性を示す例として中央アジアの火の神ファローが毘沙門天の大将軍パンチカと融合し、鬼子母神も西アジアの豊穡の神アルドクシヨールと融合³⁹、更にこのハリティーとパンチカは竜神信仰と結びついた彫刻⁴⁰まで出土している。これらに関しては筆者は印仏研42の2号・棲神66号等で詳述している。

(四) 火の仏の包容

更に仏教にとり入れられた仏に火の仏がある。その名の如く法華経には燃灯仏や葉王品の火焰定の如き「火」についての記述がある。



スワット・ディール出土 黒色片岩
28cm×13cm

筆者はこの火の仏に興味をもち、パキスタン中の博物館を歩き、又全世界に散ったガンダーラ彫刻の中からこれを探し、自らも七・八体の「火の仏」をも集めて来た。然しこれらの仏像はほんの少し前まではニセモノとしてかえりみられなかった。なぜなら、これらのものはガンダーラの中央からではなく北辺の山中からスワットやディール地方から出土している。ガンダーラを中心から出土した仏像は黒色片岩で、これらは英国の統治時代マーシャル⁴¹やフーシエ等によって発掘された。現在パキスタンやインドの博物館にあるガンダーラ彫刻はこの頃のものが多い。然して第二次大戦後、北辺山地やスワット及びディール等から

出土（主に盗掘）したものは、これらとは全然傾向の違うものである。前者がギリシャローマの影響の多いのに対し、後者はベルシヤや中央アジアの影響のものである。為に後者の傾向のものが出土しても、一時「ニセモノ」として考えられていた。最近筆者の入手した彫刻のように「火が法衣を着ている」といった感じのものまで出土するに至っている。これらは前者の常識を超えていて「ニセモノ」の烙印をおされていた。

然し、クシヤンのコインの研究からこれがオリジナルなものであることがわかった。即ち、ヴィーマカドフィーセス王⁽⁶⁾から王の肩に火が出、これがカニシカ、特にフヴィシカになると王の体から炎々と焰が立ちのぼり、裏面の神像は火の神とはいえやはり体全体から火がもえ上っている。

神を超越者として考えるだけでなく王をも超越者として考える表現の手段として火を使っているからである。従って私のコレクシヨンの仏も肩から火が「ちよろり」と出ているものから、体全体、即ち頭光背や身光背が火でおおわれているもの、更に仏頭が火焰になっていて、前述の「火が法衣を着ている仏」とまで言われる、即ち仏の实体は火であると思われる程の像まで出現し火によって仏の超越性が強調されるに至る。

然して火はどこから来ているか、リグベータにアグニの火があるが、これがヒンズー教になってシバ神やヴィシュヌの二次的な神となっていたのがクシヤンの時代に復活したとは考えにくい。どうやら西方の影響と推定出来る。これを示す例として涅槃図がある。有名なシクリの仏塔に彫られた涅槃図等のガンダーラの出土のものには、棺前に端坐するスバドラ⁽⁷⁾には火焰はない。百二十才で入門した釈尊最後の弟子たるこのバラモンは、他の人々が天を仰ぎ地に伏して号泣していてもこの人だけは生死を超越して三昧に入っている。こうした図柄がガンダーラ側に共通した傾向であった。

一方パーミヤンの涅槃図ではスパトラは火を肩から出し火焰定に入っているのが二例⁽⁶⁾ある。然し年代がガンダーラは三・四世紀、パーミヤンは五・六世紀であるから単純に火は西からとは言えない。然しここにユニークな比較図がある。燃灯仏である。ラホールの博物館中央のシクリの仏塔の正面に、釈尊の前にひざまづくメーガ、その髪の毛を踏む釈尊⁽⁶⁾。然しこの仏の肩には火はない。然しアフガニスタンのカピシ周辺⁽⁷⁾出土の燃灯仏には肩から火がもえ出している。シクリのストゥーパは三・四世紀、アフガニスタン側のものもやはり三・四世紀と最近専門家に編年されているから、ほぼ同時代のものといえる。昔はギリシャローマ的影響のこい作品は早く、野暮⁽⁸⁾たいローカル色のこいものはギリシャ文化の衰退期のものとされて来たが、最近はギリシャ文化をとり入れるにも、その民族種族性を残した独自性をもっている、即ちギリシャ文化のとり入れる手法は色々あって画一的でないとの考え方が出て来た。従ってガンダーラもスワットもディールも民族種族の文化とギリシャ文化との接触に当って夫々独自性があるということである。だからシクリの燃灯仏彫刻とカピシ周辺出土の九・十体の燃灯仏とは時間差はない。こうなると西には火があつて東にはない。即ち、火は西方の影響であるといえよう。こうした西からの火が燃灯仏という釈尊の受記にかかわる重大な事件に、かかわっている。即ちこの西方の火を自己の中に入れ燃灯仏という重要な仏の「神話」を作つて行き火の神を仏教の中にとり入れようとする、その包容性を、前記メドゥーサを封じ込めた文化との対比から、筆者は強調するものである。

い) 竜神信仰

(イ)と(ロ)の例の如く仏教は他の宗教を排斥するのではなく、自己の中にうけ入れている。これは仏教というより東洋の教知である。筆者は竜神信仰の包容についてしばしば論及して来た⁽⁹⁾。今回はメドゥーサとの対照から竜神信仰と仏

教との関係を略述するに止める。

法頭伝・大唐西域記宋雲行記等の求経僧の旅行記や律感^⑤及經典^⑥に描かれている如く、仏教以前のガンダーラには竜神信仰が流布していた。そして又竜神信仰の祠が仏教の僧院や塔に変わって行くさまが書かれている。例えばナガラハラ（アフガニスタンのジュララバード）の仏影窟^⑦はかつて竜の住んでいた洞窟だが、釈尊に教化され、そこに仏影を残したとか、カシミールの都スリナガルでは、池の中に住む（カシミールには大きな湖があって、ヒマラヤ山中の水郷をなしている）竜が、仏弟子マディアンティカに教化され、その池を干して僧院を作ったとある。これは前記求経僧の旅行記と善見律毘婆沙やセイロンのマハーバンサ、マハーバスツの記事と共通している。故に仏教は竜神信仰の徒を教化すると共に、その神を仏教の神として包容して行ったことがわかる。

それだけではない、四分律には海の底の竜王の城へ人々を幸福にする宝珠をとりに行く場面がある。悪戦苦斗やと竜王に会って宝珠をもらうことが出来た。その時竜王は「二竜をつかわして」^⑧これを守護させて地上に送り帰させたとという話があるのである。こうなると竜は宝珠を守る「守護神」という性格をもつて来る。これに類した話は求経僧の旅行記に出ている。即ちカニシカが後に言う所謂カニシカ大塔を作って、その上に真珠を散りばめた網で覆って荘厳した。然し後世に盗人が現れてこれを盗ることを恐れ、網をたたんで穴を掘って埋めた。そして『四竜をして』^⑨守らしめた^⑩とあるから竜は守護神となって来ている。

筆者はパキスタン中の博物館や全世界の博物館や個人蔵の菩薩像を単念に調べあげて来た。その結果約半数以上の像の胸に竜が彫られていた。向き合った竜が宝珠や経巻をくわえている。なぜ二竜か、これが四分律の二竜か否かは資料が乏しくて筆者には分らない。

胸に彫られた竜とメドゥーサ (高橋)



弥勒菩薩の胸の竜 ラホール博蔵

胸に彫られた竜とメドゥーサ（高橋）

竜の上に坐すパンチカ（上）とハーリティ（下）



然し「経巻宝珠をくわえている」ことだけは事実である。これからみると経巻や宝珠を守っているとしか考えられない。然も仏位の次の、然も仏滅後七億何千万年後の未来世に、仏として出現して人々を救う弥勒仏になる菩薩の胸の中で「仏法」を守るという所が注目に値いする。然もこの竜は仏教以前の異教の神、これが仏教の包容性でなくて何んであろう。



かくて同じ地母神系統の竜とメドゥーサ、これが一方では守護神として後々まで仏教の中にとり入れられて行くのに対して、ローマ皇帝の胸に一旦は彫られながら一神教がひろがって来ると、地下水槽の中に封じ込められる悲惨な運命になるメドゥーサ。この対比、ここに仏教の特徴があった。それだけではない、地母神の数々・

夜叉或は地神更に異教の神である火神をも自らの中に神として包容するだけでなく、とり入れられた異教の神々同士が和合している。竜の上に坐すパンチカ・ハリティーがそれである。ここに異文化包容と排他の東西文化の特質と典型を筆者はみるのである。

国連が出来た時、参加国はただか百か国に満たなかったが、現在は二百五十か国にもなっている。民族自決、夫々の文化の独自性を強調する時代の趨勢になって来た。こうした時代に、他の存在・文化の存在を認めない排他的な一神教的なものでは争いは尽きない。ユゴでの血で血を洗う戦、アラブとイスラエルの争いがその例である。こうした排他の争いを救いうるのはアショカの摩崖証勅の示す東洋の叡知、和の精神、仏教特に法華經の寛容性・包容性、これこそ地球の未来を救うものであると確信するものである。

[註]

- (1) 栗田巧著 *Gandhara Art II*, p48
- (2) トルコ・アンタリヤ博物館蔵
- (3) メドゥーサは大地(ガイヤ)の子ケトと海の神ポントスのポルキユスとの間の子
- (4) 経典の中の八大竜王とか寺の梁や柱に竜の彫刻
- (5) トルコ・シデ遺跡ダイディマ遺跡等のアポロン神殿の廃墟に見られるこわされたメドゥーサ
- (6) 東ローマ帝国ユステイニアスがイスタンブールに地下水槽を作った時
- (7) エフェソス博物館蔵女神アルテミスの像の無数の乳房
- (8) アンカラ博物館蔵チャタルヒュク遺跡出土二十センチ大の土製の太ったビーナス
- (9) エリアーデはブカレスト生れ世界各地の大学で講ずる宗教学者、エリアーデ選集十二卷有名な「聖と俗」「シャーマニズム」がある。

胸に彫られた竜とメドゥーサ(高橋)

胸に彫られた竜とメドゥーサ（高橋）

- (10) エリアーデ「大地農耕女性」堀一郎訳未来社
- (11) 釈尊誕生地ルンミディの池畔に大木の下に祠や赤粉
- (12) インド各地の奇岩洞窟を神の住む所とされ、赤い粉がぬられ聖所とされている。
- (13) シリア・マリ遺跡出土 アレッポ博物館蔵
- (14) 京都国立博物館 縄文土器にマムシが彫られた土器
- (15) 西南インドに無数の石窟 夏長者達の避暑の為寄附、バキスタン西北方から西アジアまで石窟が多いのは寒暖の差の多い所では洞窟が快適
- (16) 棲神六十三号三十頁に写真掲載
- (17) パールフット・サンチー・マトウーラに美しいヤクシヤ・ヤクシーの彫刻
- (18) ナガールジュナコング等に仏塔の下にコブラのいる彫刻多数あり。
- (19) カンボジア・アンコールワットは蛇におおわれている。
- (20) 蛇目のイシュタール（ ）
- (21) クレータ島イラクリオン博物館
- (22) トルコ南部ベルゲ・シデ遺跡等
- (23) シリア西北部ウガリットの五十キロ北方のジュベル・アクラ山にパール神が住むと考えられたのはこの山がこの地方で最も早く冬雨がふる所だから。
- (24) アレッポ考古博物館蔵
- (25) 旧訳聖書創世記創造と墮落（二・四―三・三四章）
- (26) 旧訳聖書三人の客人・ソドムとゴモラ（一八一―一九章）
- (27) シデ遺跡アポロン神殿に無数のメドゥーサ像出土
- (28) アンタリヤ博物館蔵
- (29) 中村元氏原始仏教から大乘仏教へ・一六一―一七頁
- (30) 印仏研第三七の二、夜叉信仰の背景 棲神五八号徒地涌出 棲神六三号樹と釈尊等で論及

- (31) 仏伝及びガンダーラ彫刻に
- (32) *Latina Vistra* chap. VIII.
- (33) 方広大莊嚴經出家品(大3—五七五下)
 仏本行集經第十七捨官出家品(大3—七三三下—七三三上)
 普曜經第四出家品第二(大3—五〇七中)
 仏所行讚出城品第五(大4—10—中)
 修行本起經出家品第五(大3—四六八上)
 仏本行經出家品第一(大4—六八下)
- (34) 樓神五八筆者の「從地涌出」三〇頁に写真掲載
- (35) 樓神五八 三三頁に写真掲載並びに関連記事
- (36) ジャータカ三〇五パラサ本生、その他ジャータカ五〇・四七九・五三七。印仏研三七の二夜叉信仰の背景で論及
- (37) 中村元氏前掲書五〇頁
- (38) 中村氏前掲書五三頁
- (39) 筆者は仏教学年報五二号の六一頁で論及
- (40) 樓神六六号「一仏乗のもとに」九頁に写真掲載
- (41) Marshall Taxila 等、フーシェ仏語発掘報告書多数
- (42) スワット地方出土、同じ場所にあった対の彫刻に中央アジアの人物像
- (43) Rosenfield (ローゼンフェルズ) *Dynastic Art of kushan* 卷末コインの写真集
- (44) 栗田氏 *Gandhara Art I*, 242, 243 参照
- (45) 京都大学ペーミヤン 1・2・3・4
- (46) 宮地昭中央アジア涅槃図の図像学的考察 仏芸一一七号
- (47) 栗田氏前掲書 一一四 七四参照
- カーブル博物館蔵燃灯仏像

胸に彫られた竜とメドゥーサ(高橋)

胸に彫られた竜とメドゥーサ (高橋)

- (48) 田辺勝美氏迦畢試国出土の仏教彫刻の製作年代 (オリエント昭和四八年)
(49) 定方晟 燃灯仏の起源とナガラハラ (印仏研19—1) 一九七〇
(50) 榎神六六号「一仏乗のもとに」を論及び印仏研42—2号
(51) 善見律毘婆沙第二 (大24—六八四下—六八五上)
根本説一切有部毘奈耶雜事四〇 (大24—四一〇下)
(52) 阿育王經大50—一五六上中、セイロン島史八—二三等々
(53) 大唐西域記 那揭羅曷国 (大51—五七九上中)
道栄伝 (長沢訳宗雲行記二二〇—二二二頁) (東洋文庫)
(54) 大唐西域記 迦湿弥羅国 (大51—八八六上中)
(55) 四分律四十六 破僧撻度品 (大22—九二二中)
(56) 宋雲行記道栄伝二一〇—二二二頁 (東洋文庫)

参考文献

栗田 功 ガンダーラ美術I・II

安田喜憲 大地母神の時代 (角川選書)

〃 気候が文明を変える (岩波書店)

田辺勝美氏

杉山二郎氏 鏡光仏本生図と施瓦畏の起源

定方 晟 パーミヤンの仏教遺跡について

燃灯仏の起源とナガラハラ—印仏研19—1 (一九七〇)

ミイロと弥勒

ナガラハラおよびハツダの仏教